第 21 回
宗 教 倫 理 学 会 学 術 大 会
The 21st conference of
the Japan Association of Religion and Ethics

大会テーマ
「「心」から宗教倫理を問う」
Religious Ethics from the perspective of Kokoro (heart, mind, and spirit)

◆2020 年度研究プロジェクトテーマ
「「心」から宗教倫理を問う ―日本宗教の現状と課題を中心に― 」

これまで本学会では、生命や環境などをめぐり、諸宗教と諸学問分野が共有し、また現代社会が直面する問題について共同研究を進めてきた。2020 年度の研究プロジェクトでは、こうした本学会の研究成果を踏まえた上で、昨年度に引き続き「心」をめぐる諸問題に取り組んでいきたい。「生命」と同様に、「心」は広範な問題領域を包括する概念であり、そこにおいては、認識・認知・意識だけでなく感情・情動そしてスピリチュアリティ（霊性）が相互に密接に関連し合っている。また関係する学問分野には、宗教学、倫理学、哲学はもちろん、心理学、社会学、認知科学、脳科学、あるいは人類学、教育学、法学などが含まれる。

「心」に関わる問題が広範に及ぶことは、多様な研究テーマを専門とする全ての会員がそれぞれの研究の立場から研究プロジェクトに参加することができると同時に、問題が拡散し焦点が定まらないことも考えられる。そこで、2020 年度は「心」に関する問題領域の中でも、特に日本宗教をめぐる現状と課題に焦点を合わせたい。私たちが直面する世界規模の倫理的な諸課題に対して、日本宗教の特徴を踏まえた視点から、いかに応答するかは、本学会において検討すべき問いであり、真剣な議論が求められる。会員のみなさまには、積極的な発表・参加を大いに期待したい。

なお、「心」というテーマは多くの宗教が共有する問題領域であるが、現代宗教をめぐってしばしば見られるような、歴史的な諸宗教がその個性を希薄化し、「心」に収斂するかに見える動向とは、一線を画することが必要である。「心＝宗教」という漠然としたイメージに寄りかかるのではなく、むしろ、個々の宗教の歴史的な個性とその現代的意義を問い直す方向で議論を展開したい。

日 時：2020 年 10 月 3 日（土）
午前 8 時 30 受付
午前 9 時 00 開会
Online（※Zoom）学会
第 21 回学術大会実行委員長
堀内みどり（天理大学おやさと研究所 教授）
実行委員会
〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1
龍谷大学 杉岡孝紀 研究室
E-mail：taikai2020@jare.jp
宗教倫理学会 HP：http://www.jare.jp

宗教倫理学会第 21 回学術大会プログラム

【開会の挨拶】

9:00～

【研究発表（午前）】〔20 分発表 10 分質疑応答〕

司会： 竹下ルッジェリ・アンナ（京都外国語大学教授）

1．9：10～ 9：40

ÖBERG Andrew（高知県立大学 文化学部・准教授）

Moses Sitting Zen: Buddhism's 'No', Judaism's 'Yes': Some thoughts on life affirmation via selected Hebrew narratives

2．9：50～ 10：20

徳田 信（同志社大学大学院 神学研究科 博士後期課程・大学院生）

赦しと和解をもたらす共同体性 ―北米のキリスト教思想を中心に―

司会：澤井義次（天理大学名誉教授）

3．10：30～ 11：00

奥山史亮（北海道科学大学 全学共通教育部・講師）

エラノス会議におけるユダヤ・ルネサンスと宗教学の展開

4．11：10～ 11：40

林 研（大阪経済法科大学 21 世紀社会総合研究センター・客員研究員）

多神論の可能性 ―ジェイムズの宗教論から―

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～ 休 憩～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～

【研究発表（午後）】〔20 分発表 10 分質疑応答〕

司会：井上善幸（龍谷大学教授）

5．13：00～ 13：30

釋氏真澄（浄土真宗本願寺派宗学院・研究生）

仏教婦人会の倫理観と実践

6．13：40～ 14：10

釋 大智（龍谷大学大学院・研究生）

親鸞浄土教における凡夫観の考察 ―共同性の問題を中心に―

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～ ＊休 憩～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～

【会員総会】

14：30～15：50

【閉会の挨拶】

15：50

研 究 発 表 要 旨

１．オバーグ・アンドリュー（高知県立大学 文化学部・准教授）

【題目】

Moses Sitting Zen: Buddhism's 'No', Judaism's 'Yes': Some thoughts on life affirmation via selected Hebrew narratives

【発表要旨】

Life can be a difficult phenomenon to acquiesce to, much less embrace. Tragedy is seemingly around every corner, and very many philosophies and faiths both ancient and modern have championed the exit from existence over its entrance. Existentialism and nihilism proclaim the seizure or suicide of one's undesired birth, moksha and nirvana the blessed non-return of a wandering soul. Yet against these currents the Jewish ideational approach to being has consistently given the world a 'yes', and this apparently despite having every reason not to. In our discussion we therefore consider how we might dig out from within Judaism an abstracted "spirituality" for our times, a numinousness that is not necessarily a "belief", but rather a "faith" more in line with a hope. Our objective is to learn how to think differently than we otherwise might, and thus towards this modest goal we set out to explore some images from two well-known Hebrew narratives, attempting to bring forth core conceptualities which could then be applied to an affirming notional framework befitting anyone who would ponder – who would feel – a way through. How might we state this 'yes'?

２．徳田 信（同志社大学大学院 神学研究科 博士後期課程・大学院生）

【題目】

赦しと和解をもたらす共同体性 ―北米のキリスト教思想を中心に―

【発表要旨】

長らく牧会的配慮の中心が罪の赦しの宣言であったように、赦しと和解はキリスト教の中心的使信の一つである。ローマ・カトリックでは告解によって司祭が信者に赦罪を与えたが、プロテスタントではルター以来、信徒による相互牧会の道が開かれた。それはマタイ福音書 18 章に基づき「つなぐこと・解くこと」と称され、特に再洗礼派系教会において実践された。そしてその信仰的系譜に立つ J.H.ヨーダーは、赦しと和解をもたらす教会倫理としてこの営みを神学的に再提示した。

ヨーダーによると、この教会倫理はキリスト教会自身の刷新と社会的応用という二つの射程を持っている。たとえば修復的正義や非暴力コミュニケーションが社会的応用の実例として挙げられる。しかしヨーダーは、教会内部において和解が実現してこそ、広く社会に説得力を持つことができるゆえに、教会での実践が優先されるべきであるという。キリスト教が社会に貢献する基本的な道筋を、教会が「証しの共同体」となること、すなわち赦しと和解を実現する共同体性を自らのうちに育むこととして理解したのである。

そして、かかる共同体性を育むために有用なのが、S.ハワーワスや H.ナウエンの思想である。ナウエンはハーバード大学から障がい者コミュニティに働きの場を移すことで、知性に

留まらない身体性を伴ったキリスト教霊性を体現した。そこでの身体性には、文字どおりの肉体のみならず「キリストの体」（パウロ）と表現される共同体的側面が含まれる。そしてハワーワスはキリスト教的共同体性を「生成」の観点から提示した。それは、赦しと和解をもたらす神の物語に共同で身を浸す中で、「自分たちの物語」として体得するよう変えられていく道である。

３．奥山史亮（北海道科学大学 全学共通教育部・講師）

【題目】

エラノス会議におけるユダヤ・ルネサンスと宗教学の展開

【発表要旨】

近代ヨーロッパのユダヤ運動においては、西欧への同化政策やシオニズムをめぐる議論を通して、民族や宗教の実体性、民族精神の学的対象化という問題のなかで「原初的なユダヤ性」の探求が試みられた。この「原初的なもの」を探求しようとする試みは、ダーウィン進化論の流行を背景にして、心理（精神）研究や宗教学、哲学、人類学など当時の学問の動向と連関したものであり、近代学問史をたどる上でユダヤ運動との交差という視点は不可欠のものである。本報告ではエラノス会議におけるユダヤの問題に着目することにより、心理（精神）研究とユダヤ運動の交差および衝突について考察したい。

エラノス会議は、諸学問の研究者が集って宗教の根源的一体性、すなわち「聖なるもの」を「治療」の領域において復興しようとした学際的会議として知られている。一般的にはユング分析心理学の理論展開の場とみなされる傾向にあるが、近代ユダヤ運動の代表的論者が参加し、それぞれの見地よりユダヤの民族性や宗教性を議論した場であった。エラノスにはシオニズムの重鎮であるブーバーやレオ・ベック、ユング派のユダヤ系分析家エーリッヒ・ノイマンやアニエラ・ヤッフェ、ヨランデ・ヤコービ、近代ユダヤ学の立役者であるゲルショム・ショーレムなどがそれぞれの思惑を抱いて参加した一方、ユングやエリアーデは反ユダヤの疑惑をかけられた人間としてこの問題にかかわった。ユダヤをめぐる折衝はエラノスに内在していたのであり、エラノスは心理（精神）研究とユダヤ運動の交差を考察する一つの事例として位置付けられる。

本報告ではとりわけ、ユング派の分析家エーリッヒ・ノイマンのユダヤ性をめぐる議論に着目する。ノイマンは 1934 年にイスラエルに移住した「シオニスト」であり、エラノスの常連メンバーであり、『グレート・マザー』『意識の起源史』の著者としても知られている。ノイマンはユング派の重鎮であったが、ユングが「精神療法一般医師協会 Allgemeine Ärztliche Gesellschaft fur Psychotherapie」において、反ユダヤ的と批判されることになる文書を発表した際、その真意を問う手紙を送り、議論を展開した。これら書簡資料の分析から、ユング派的治療、ユダヤ性、宗教学的概念の交差を抽出し、宗教研究と倫理性をめぐ る議論につなげたい。

４．林　研（大阪経済法科大学 21 世紀社会総合研究センター・客員研究員）

【題目】

多神論の可能性 ―ジェイムズの宗教論から―

【発表要旨】

2000 年代の初頭、多神教が争いを生まない平和的な宗教として喧伝される風潮があった。その後、一神教・多神教の概念は理解が進み、それ自体戦争や平和に直結しないことはもちろん、これがクリティカルな区別ではなく、多神教にも一神的な側面が、一神教にも多神的な側面があることが示されてきている。したがって、単に宗教を二分することは不適当なのだが、宗教の多神的な側面を考察するということならば、価値観の対立を調停すべき現代社会において一定の意味を持つであろう。

近代西洋哲学において、多神論を擁護する哲学者は極めて稀であったが、そのひとりがウィリアム・ジェイムズである。ジェイムズは哲学的探究の結論として多神論的な宗教観に至ったが、これには彼の「経験的な」研究方法、そしてプラグマティズムの思考法が大きく影響している。ジェイムズは宗教的経験をデータと捉え、科学的方法による宗教分析を試みたが、人間の経験を根拠にする限り神の唯一性は見出すことができない。むしろ、様々な人が様々な経験をすることをそのまま受け取るなら、神の複数性は合理的な考えとなる。

一方、プラグマティズムは、少なくともジェイムズにおいては宇宙を統一原理で説明することを拒み、真理を複数に開いてゆく思考法となる。近年、プラグマティズムが新たに流行しつつあるのは、多様性を課題とする世界に求められているからとも言えるのだが、近年のプラグマティズムにおいて、宗教についてはあまり論じられていない。ジェイムズの宗教論は、その接点になるかもしれない。

ジェイムズの多神論的宗教観は、「悪」を原理的に除去可能なものとするため、人間の「改善」への意欲を鼓舞する。また、神を具体的に捉え、個性を持つ対面相手と見る姿勢は、抽象的な偏見を持たず他者に応答する姿勢につながるだろう。哲学的に吟味された多神論は、倫理的示唆をももたらしうるのである。

５．釋氏真澄（浄土真宗本願寺派宗学院・研究生）

【題目】

仏教婦人会の倫理観と実践

【発表要旨】

現在、浄土真宗本願寺派は「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」という理念を実現するための宗門全体の実践目標として、「貧困の克服に向けて～Dāna for World Peace～子どもたちを育むため」というテーマを、仏教が重視してきた「ダーナ（布施行・Dana)」の精神のもと掲げている。本発表ではこのダーナの実践を先駆けておこなってきた、同派仏教婦人会（女性門徒組織）の倫理観と実践の変遷を背後にある教学・教化の内容とともに考察し、現代の課題について検討する。

親鸞(1173-1263)在世中に形成された初期念仏集団は、真宗門徒として増加していくが、それに伴って生じた風紀上の問題により女性門徒の集団が生まれていく。蓮如宗主（14151499）の時代には「女人講」「尼講」等の女性の門徒組織が盛んに形成され、広如宗主（1798- 1871）は本山財政を立て直すため協力を得ようと「最勝講」という女性の組織の普及をはかる。明治 20（1887-）年代には日本社会全体がキリスト教や西洋文化の影響を受け一般婦人による慈善会や教育会等の結成が活性化するが、本願寺派においても明如宗主（18501903）や島地黙雷等の助力により「婦人教会」開設の動きが全国で高まり、濃尾大

地震（1891）被災者の救援活動を契機として婦人たちの慈善運動が盛んになる。そして明治40（1907）年、仏教婦人会統轄のため本願寺に「仏教婦人会連合本部」が設立され、総裁に大谷籌子裏方と本部長に宗主実妹・大谷（九条）武子が就任し、日露講和後には婦人会の事業が恤兵か ら慈善に重点が置かれるようになると組織は強力かつ活発になっていく。昭和22（1947）年、大谷嬉子裏方を総裁として「仏教婦人会総連盟」結成式が行われ、昭和 40（1965）年には第 2 回世界仏教婦人会大会にて「ダーナ（布施）の日」（毎年 2 月第 2 日曜日）が制定される。そして現在、ダーナの精神は日本のみならず海外に及ぶ仏教婦人会会員たちの社会 実践の核となり、宗派全体に広まりつつある。

６．釋 大智（龍谷大学大学院・研究生）

【題目】

親鸞浄土教における凡夫観の考察 ―共同性の問題を中心に―

【発表要旨】

親鸞思想の際立った特徴のひとつとして、「罪悪性の自覚」という徹底した自己内省を挙げることができる。家永三郎は、親鸞の悪人観に「否定の論理（自己の煩悩の徹底した自覚）」を見出すことによって、日本仏教史における一つの到達点として位置付けている。家永が語った「否定の論理」の影響は大きく、哲学や文学といった領域からも親鸞は注目を集めることになり、近代的・実存主義的な親鸞像が構築されていくことになった。こうした親鸞解釈の基本にあるのは、「罪悪生死の凡夫」や「悪人」といった言説を、「親鸞の徹底した自己内省的態度」として読むという立場である。以上のような、自己の内面へと折り返される凡夫の解釈は、親鸞の凡夫観を論じる際の基本線になっていると考えてよい。しかし、発表者の見通しでは、親鸞の凡夫観には「他者との共同性」も析出することが可能である。

本発表の目的は以下の二点である。一つは、親鸞の凡夫観と同朋思想を接続することである。徳永道雄は親鸞の凡夫観について①転成性、②伝道性、③同朋観、④倫理性、という四つの性質から説明している。徳永の議論を下敷きとしながら、親鸞の「われら」という言説を媒介することによって、凡夫観に基礎付けられた同朋思想を考察する。

もう一点は、「われら」を経由した共同体論を再構築することである。「われら」の共同体を論じた研究として、安冨信哉らによる共業・共感論が挙げられる。安冨は曽我量深がいう「宿業共感」を前提に置き、親鸞思想における共同体の論理を、共業と共感という概念から展開させた。本発表では、このような共業・共感に基づく共同体論に対して、共在性という視点を導入する。共在性とは人類学者の木村大治によって提唱された概念であり、必ずしも「他者を理解すること」を前提としない共同体の在り方をいう。以上のような分析視角を通じて、共業・共感論とは異なる「凡夫―同朋」の共同体を論じたい。